

中長期目標 (学校ビジョン)	(1) 道德教育の充実 ・高校生として望ましい規範意識、生活習慣を確立する。 ・自己肯定感を高めるとともに、他者に対する思いやりなど、周囲と豊かな人間関係を構築することのできる豊かな心を育む。 (2) キャリア教育の充実 ・社会的問題に関心を持ち、社会の一員であることを自覚させる。 ・探究活動とおして、社会的問題の解決に向けて必要となる能力を育成する。 ・将来の生き方を前提とした進路指導を展開する。 (3) 高い志を有し、学ぶ意欲を向上 ・将来の生き方を考えさせることで主体的に学ぶ姿勢を涵養するとともに、社会問題の解決に向けて必要となる確かな学力を育成する。 ・授業とおして論理的思考力、表現力、コミュニケーション能力を高める。	今年度の 重点目標	(1) 将来を見越した生活習慣の確立 (2) キャリア教育の充実 (3) 主体的な学習姿勢の構築、及び学力の向上 (4) 情報収集、情報発信の充実

年 度 当 初		評価結果(中間反省9月)					
評価項目	評価の具体項目	現 状	目標(年度末の目指す姿)	経過・達成状況 ※数値%の表記は生徒アンケート結果より	評価	改善方策	
将来を見越した生活習慣の確立	①社会や人とのつながりを意識した生活習慣と表現力を身につける	【生活支援】 ・校内では自分から挨拶できるが、校外での挨拶は自分からできる生徒が少ない。好感の持てる挨拶については依然ハードルが高い。 ・ルールを守った生活を心掛けている生徒が多い中、スマホのルールを守れない生徒がいる。 ・TPOを意識したり、自分の置かれている立場を考えて行動出来ない場面がある。 ・正しい服装を意識している者が多い中、特定の生徒の意識が低い。 ・メモを取るなどしてスケジュール管理の出来る生徒が少ない。	・相手の目を見て口角を上げ好感の持てる挨拶や返事が積極的に行える。 ・TPOを意識して、相手軸に立った行動をとることができる。 ・本校の一員として、ルールを守った生活や自分の役割を果たすことができる。 ・人格の向上を目指して、失敗をチャンスに変える思考ができる。 ・スケジュール管理が出来、見通しを持った余裕ある行動ができる。 ・通院以外の遅刻者ののべ人数を年間150名以内とする。 ☆日常的な生徒観察により評価する。 ☆年間予鈴後登校者数・遅刻者数を目安に評価する。	・積極的に意欲的な行動や素直な態度に気付いたら声をかけ、褒めて育てる。 ・よりレベルの高い挨拶をすることの意味や大切さを、ステージやホーム、授業などで繰り返し伝えていく。 ・失敗をした生徒に対し、様々な立場から丁寧に励ます。 ・次なるステップが自分で明確にできるよう、手帳などにメモや記録することを指導する。 ・生徒手帳の復活を検討する。 ・月ごとの遅刻者数を見る化し、生徒に自覚を促す。	・90.3%(前年比3.2%増)の生徒が基本的な生活習慣について適切な指導がなされていると捉えており、多くの生徒が挨拶の姿勢や服装を整えること、ルールを守れることを意識した生活ができるようになったと自覚している。その一方で、来校された保護者の方々や来客に対して自ら挨拶できる者が減ってきている。 ・80.0%(前年度比1.9%増)の生徒が生活規律を守らない生徒への指導が充分になされていると捉えているが、ステージによって指導に差があると感じている者もいる。 ・失敗した生徒に対しては、自己分析や今後の心構えなどを記入させ、対話を大切に、自分自身で改善の方向へ向けられるようにしている。また、保護者との連携も密に行っている。 ・通院以外の遅刻者は、のべ36名であるが、予鈴以降に登校する生徒は、のべ539名。(8月31日現在)S3では登校した者から着席し学習に取り組む習慣が付いてきている。 ・スケジュール管理できる力を養うことも目標に、年度当初は、メモ帳を活用する生徒の姿を頻繁に見かけたが、夏休み後はあまり目になくなっていく。	C	・ルールやマナー、礼儀の大切さについて、教員だけではなく生徒側からも日常的に伝え、実践できるようリーダーを育てていく。 ・挨拶強化週間などを設け、緩んできた状態を引き締める。 ・失敗のあった生徒には、落ち着いた状況の中で事情を正確に確認していき、保護者の協力も得ながら指導に差が出ないようにしていく。 ・月別集計結果を参考に、時間に余裕をもった生活をするなどの大切さを、SHRや個人に向けて様々な立場から話をしていく。 ・メモを取る習慣やスケジュール管理、時間に余裕を持った行動は高校の間に身に付けておくべき重要な習慣なので、来年度へ向けて生徒手帳の復活を検討し、その利用を通して社会性を育てる。
		【S1】 ・関わりのある教員には挨拶するが、関わりのない教員には挨拶をしない生徒が少なくない。 ・授業や集会の内容を、自らの成長や将来の姿とつなげて考えることができる生徒が少ない。 ・場にふさわしい行動がとれない場面がある。	・来客も含めて、校内で対面するすべての大人に礼儀正しい挨拶ができる。 ・教員や講師によって発信された情報を的確に受容し、自分の将来像をイメージしながら成長の糧とすることができる。また、発信者に対して質問や意見を述べるなど、適切な反応を示すことができる。 ・倉吉西高校の一員であるという自覚を持ち、校内はもちろん、地域の中においてもTPOを意識した行動をとることができる。 ☆生活の軌跡、日常の生徒観察により評価する。	・挨拶することの意味をステージやホームで継続的に伝えていく。 ・学ぶことの目的や意義、社会で生きていくために必要なことを適宜伝えていく。また、発表しやすい雰囲気作りや発表の機会を多く設定する。 ・集団を意識させ、個の行動が集団に影響を及ぼすことを自覚させる。間違った行動をとった場合は、時を逃さず正していく。	・自発的な挨拶ができる生徒は増えているが、すれ違っても挨拶をしない生徒がまだいる。 ・授業や講演を聞く態度は概ね良好であるが、受け身の生徒がまだ多く、一つ一つの物事を未来につなげようとする生徒は多くはない。 ・5分前行動が定着しつつあるが、授業に遅れそうになる場面でも急ごうとしない生徒がいる。全体的に落ち着いた行動がとれるようになってきたが、周りの雰囲気流され、他者への配慮に欠ける場面がまだある。	C	・教員側から積極的にコミュニケーションをとりながら、挨拶の習慣付けを行い、主体性を育てていく。 ・物事の意義や目的を丁寧に伝え、それが自分の未来とどのようにつながっていくのかイメージさせる。
		【S2】 ・挨拶ができる。時間を守る。学習環境を整えるといった行動は身に付きつつあるが、自らの生活を正す力を身に付けている生徒は少ない。 ・自分本位ではなく、相手や場を意識した言動ができる。	・自分で生活をコントロールする力を身に付けている。 ・自分の気持ちや感情を、TPOに応じて適切に表現することができる。 ☆生活の軌跡、日常の生徒観察により評価する	・ステージ集会やホームルーム、面談等で話をするとともに、日常生活の中での指導を継続していく。 ・生活の軌跡を利用し、生徒の生活について把握、指導を行うとともに、自己管理する力を高めていく。	・挨拶、服装に関して大多数は良いが、一部に不十分な生徒がいる。 ・「生活の軌跡」の毎回の提出と評価、また、スタディーサポートを利用して面談により自らの生活を振り返る力をつけてきている。 ・相手の立場になって物事を考えることができるが、思ったことをすぐ口にしてしまう生徒が数名いる。	C	・その場で指導することを徹底し、挨拶や服装を正す意義を理解させる。 ・「生活の軌跡」の点検と面談を継続して行い、改善を促す。
		【S3】 ・挨拶や時間を意識した行動は身に付きつつあるが、分離礼や置かれている状況、立場を意識した行動をとれる生徒は少ない。 ・4点固定など生活のリズムが確立している生徒は少ないが、手帳等を活用し、意識始めた生徒が増えつつある。	・他者の存在を軸とし、自らの置かれている状況、立場を意識した行動や発言をすることができる。 ・生活のリズムを確立し、体調管理、スケジュール管理を自ら行うことができる。 ☆生活の軌跡、日常の生徒観察により評価する	・ステージ集会やホームルーム、面談等で話をするとともに、日常生活の中での指導を継続していく。 ・生活の軌跡を利用し、生徒の生活について把握、指導を行うとともに、手帳の利用を推進し、自己管理する力を高めていく。	・進路指導やステージ集会、ホームルーム指導により、事前に報告、相談できる生徒は増えてきているが、周囲への配慮に欠ける行動や発言をする生徒も見られる。 ・進路意識が高まってきており、調査や模試の欠席者がなくなるなど、体調管理や生活リズムを意識した行動ができる生徒が増えてきた。一方で、夜更かしをするなど、生活が安定せず、体調を崩す生徒も見られる。 ・手帳を持ち歩き、メモをとるなど、スケジュール管理をしようとする生徒が増えてきている。	C	・ステージ集会やホームルーム、面談等で話をするともに、日常生活の中での指導を継続していく。 ・朝の5分前登校指導など、生活支援グループと連携しながら個別指導を行い、生徒の生活リズムの確立に取り組んでいく。 ・今後も手帳の活用を促し、自己管理能力を高め、自己実現に繋がるよう指導を継続していく。
	②講演会・生徒会活動等を通して学んだことを校内の活動に活用する	【生活支援】 ・時間通りに集合したり、静かに話を聴く習慣は出来ているが、聞いた話や生徒会活動で体験したことを、その後の自分の生活に活かして行動出来る生徒は少ない。	・前で話している人を見て、メモを取りながら話を聴くことができるとともに、積極的に自ら質問や発言をすることが出来る。 ・リーダーやリーダーを支える立場など、自分の役割を自覚し積極的に行動できる。	・授業も含め日常的に自分の考えを表出できるように、生徒が発言する機会を数多く設定する。 ・講演や行事に対して、自分の行動を振り返り、自分の課題と対策を記録するよう指導する。	・生徒会関係や服装指導などの集会では、正副ホーム長が中心となり、5分前には整列完了し、必要に応じてメモを取るなど、話を聴く姿勢が整ってきている。その一方で、素直さに欠けたり、顔を上げずに話を聴く生徒が数名いる。 ・西高祭では、感染予防対策や制限の多い中でできることを工夫したが、自分の立場を自覚した行動が取れなかったり、視野の狭い者もいて、仕事量の偏りが見られた。 ・多くの生徒会行事が中止となり、S1が活動に参加する機会が少なく、生徒会活動への関心が低い。	C	・利用状況を把握し、ケータイ・スマホの持ち込みルールや自動販売機の使用やなど生徒が自分たちで確認する機会を設ける。 ・行事などで身に付けた力や反省点を日常生活で生かせるよう、行事終了時の節目には、生徒会ニュースなどを発行し考えを表出する機会とする。 ・一つ一つの取り組みや行事の意味や目標を確認しながら生徒会活動をを行い、生徒の関心を高める。
キャリア教育の充実	①チャレンジグループ活動を通して、興味関心から進路決定までのプロセスを確立する	【キャリア支援】 ・説明会や講演会、探究活動の内容を、ノートに記録している。 ・フィールドワークやチャレンジグループ活動が、進路について考える機会となっている。 ・進路志望をもとに各グループに所属し探究活動を行い、進路意識が高まった結果、自己実現につながっている生徒もいる。一方で、進路と探究活動が一致しない、進路志望が定まらず探究活動の深化が見られない生徒もいる。	・チャレンジノートに記録する習慣が身につけており、考えや感想をまとめることができる。 ・大学・学部、職業に関する理解を深め、テーマ設定や研究活動が自らの進路につながっている。 ・フィールドワークなどの研究成果をまとめ、情報機器を活用して校内の発表に限らず校外でプレゼンテーションを行っている。 ☆S3のチャレンジグループ活動のアンケートにおいて、「積極的に取り組めたか」、「講義や施設見学により仕事や施設の役割などの理解を深めたこと」ができたか、「さらに学びたい、知りたいなどの知的好奇心が深まった」、「進路目標が決まったり、目標に対する情熱が高まったなど、影響を与えた」の各質問項目いずれにおいても、6割以上の生徒が「とても思う」「やや思う」と回答している。	・手帳等を活用し、普段からメモをとる習慣を身につけさせる。 ・担任やグループ担当教員による個人面談をより充実させ、テーマや進路についてさまざまな角度から指導する。 ・進路とチャレンジグループ活動について、卒業生に体験談を語ってもらい、進路意識を向上させる。	・S1・2では、担任がチャレンジノートを点検し、生徒の様子を把握するようにしている。ノートを活用し、記録する習慣がついてきており、内容や感想も相手を意識した表現になってきている。 ・S2では、チャレンジグループ活動のテーマ設定に悩んでいる生徒が少数見られる。 ・卒業生による体験講話は未開催だが、鳥取大学オープンキャンパスや、外部講師を招聘して行った小論文・志望理由書の書き方指導講演会等は、生徒にとってよい刺激となった。 ・S3のチャレンジグループ活動のアンケートにおいて、「講義や見学などの活動内容」を除く全ての項目において、「とても思う」「やや思う」と答えた生徒が95%を超える結果となった。特に「進路目標、進路目標に対する情熱高揚」については、昨年度と比較しても高い結果となっており、生徒にとって充実した活動であったことが伺える。項目中、唯一95%に到達しなかった「講義や見学などの活動内容」(93.3%)は、新型コロナウイルスによる影響と発表時期が早まりスケジュールが変更になったことが理由として考えられる。	A	・「講義や見学などの活動内容」については、内容の見直し・検討が必要である。 ・S2のテーマ設定については、今後フィールドワークやグループ面談を通して指導していく。 ・小論文指導については、3年間の指導計画を作成する。 ・チャレンジグループ活動については、次年度の日程も確認しながら、計画的に指導していく。
		【S1】 ・チャレンジグループ活動に対する意欲はあるが、積極的に取り組もうとする生徒はまだ少ない。	・チャレンジグループ活動が、現在の自分と未来の自分とをつなげるための取り組みとなっている。さらに、進路開拓のための情報収集など、目標達成のために必要な具体的取り組みを主体的に行っている。 ☆CHALLENGE NOTE等による観察で評価する。	・CHALLENGE NOTEを有効活用し、様々な体験を積み上げていく。 ・記録の質が上がるよう指導していく。	・自分の進路が展望できない生徒もいるが、主体的に進路開拓しようとする姿が少しずつ見られるようになってきた。 ・チャレンジノートへの記録が習慣化できるようになってきているが、記録の質の向上とノートの適切な活用が今後さらに求められる。	C	・チャレンジグループ活動をはじめとして、HRなどで日常的に進路刺激を与え、早期に進路目標を明確化させて自己実現への具体的行動を促していく。 ・チャレンジノートのチェックを継続し、個別に指導を加えながら改善を図っていく。
		【S2】 ・S1次に決定した研究テーマをもとに、情報の収集、分析方法について検討し、計画的に探究活動を進めようとしている生徒は多くない。	・探究活動をおとして、研究テーマに係る問題意識を育み、その解決に向けて情報収集、整理・分析し、多角的に方策を考えている。 ☆CHALLENGE NOTE等による観察で評価する	S3の発表、講演会、施設・企業等の訪問の機会をとらえ、社会に対する視野を広げ、個別面談により、進路に関連したテーマ設定・進捗状況確認や個別指導を適宜行う。	・S3による発表を聞き、課題意識を持つ生徒が増えつつある。 ・個人研究に対し、各グループで個別面談を進め、改善・修正により探究活動を進めようとしているが、研究テーマを一つに絞り切れていない生徒がいるグループや進捗状況に遅れがあるグループがある。	C	・調査、研究を通して、社会に対する視野を広げ、社会に対する興味関心を高める。 ・2月に行う中間発表を意識しながら、各グループでの面談によりテーマ決定及び探究を深めさせる。
		【S3】 ・自らの探究のテーマに沿ってフィールドワークを行い、発表に向けて準備を進めている。 ・フィールドワーク・関西など、外部との関わりにより視野を広げ、進路との関連も意識し始めた生徒が増えてきている。 ・探究が深まってきている生徒が増えているが、一方で自らの進路と探究のテーマとの関連が乏しい生徒も見られる。	・チャレンジグループ活動での探究、発表を通して自らの進路や学びに対しての意識が高まっている。 ・社会に対して課題意識を持ち、将来、社会に貢献しようとする態度が身につけている。 ☆CHALLENGE NOTE及び発表により評価する	・個人面談を実施し、活動の進捗状況を把握するとともに、進路と探究内容に関連するよう指導・助言を与える。 ・新聞活用(掲示)等、社会に対して目を向ける機会を設定する。	・チャレンジグループ活動では、それぞれのテーマについて探究を深め、グループ内発表(全員)や校内発表(代表者)を行い、進路意識を高めるとともに表現力やプレゼンテーション力を高めた。 ・コロナ禍において、日程(準備・発表)や発表形式の変更に対して自らのスケジュールを調整しながら、柔軟に対応する力を身につけた。 ・96.2%(アンケート結果)の生徒が「チャレンジグループ活動が進路目標への影響があった」と回答しており、活動が生徒にとって効果的な取り組みとなっている。 ・チャレンジグループ活動後も継続して、社会に目を向けて視野を広げるよう意識している生徒が増えてきている。	B	・新聞を活用(掲示)する等、生徒にとって社会を意識できる取り組みを行い、より多くの生徒の刺激となるよう継続していく。 ・今後も、探究の内容をより発展させながら、進路に繋がるよう個別指導を継続していく。 ・探究活動で学び得た内容が、大学入試における面接・集団討論・プレゼンテーション・小論文などに生かせるよう、今後も指導を継続していく。

評価項目	評価の具体項目	現 状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況 ※数値%の表記は生徒アンケート結果より	評価	改善方策
	②フィールドワーク鳥取等の情報収集を通して、ふるさとの素晴らしさを学び、郷土への愛着を高める	【S1】 ・鳥取の産業・民俗・伝統や文化などについての関心度は低く、ふるさとの良さを他者へアピールできる生徒は多くない。	・ふるさとの素晴らしさを理解しており、ふるさとに誇りを持ち、地元に社会貢献したいという姿勢が見られる。 ☆CHALLENGE NOTE等による観察で評価する。 ☆アンケート調査の結果で評価する。	・適切な情報提供をしながら、計画的に事前学習に取り組ませる。フィールドワーク終了後には振り返りをさせ、ステージ全体で報告会を実施することによって、鳥取の魅力等について各グループからの情報を共有させる。 ・ボランティア活動への参加を促し、報告書を提出させるとともにステージ全体で報告会を実施する。	・フィールドワークイン鳥取のアンケート結果では、85.5%の生徒は鳥取県への貢献を肯定的にとらえ、社会性や郷土愛が身についていることがわかるが、一部に地域に貢献することに対して否定的な生徒があった。また、この取組みを通して、ほとんどの生徒が鳥取県の企業に興味関心を持ち、進路意識を高めることができた。 ・新型コロナウイルスの影響により、8月からボランティア活動を実施したが、S1参加した生徒は35名。申し込んだが、中止となったり、断られた生徒もいた。	B	・チャレンジグループ活動等を通じて、将来、自分が地域や社会とどのように関わっていくのかイメージさせ、社会人として必要な基礎力とは何かを理解させそれを獲得しようとする姿勢を育む。 ・フィールドワークイン鳥取やボランティア活動の報告会を行い、ステージ全体で情報共有するとともに、さらに興味・関心を高めさせる。 ・ボランティア活動の周知を積極的に行い、年度末までにS1全員の実施を目指す。

評価項目	評価の具体項目	現 状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況 ※数値%の表記は生徒アンケート結果より	評価	改善方策
主体的な学習姿勢の構築、及び学力の向上	①授業改善や理解度の振り返り等の集約にICT機器を活用する	【学習企画】 ・対話をととして自身の考えを見出し表現することのできる生徒が徐々にではあるが増えてきている。他に依存してしまい自分の考えが述べられない生徒もいる。 ・与えられた課題を自分の力で解く生徒もステージが上がるにつれて増え、さらに、与えられたもの以外に自発的な課題に取り組む生徒も出てきているが、まだ一部である。 ・プロジェクター等従来の機器については、ほぼすべての教員が活用している。タブレットに馴染みのなかった教員も使い慣れた先生に使い方を尋ねたりしているところ。 ・生徒授業アンケートの目標値に関して、全体では、項目3を除き、「はい」の回答が昨年度より微増。経年変化を見ても、徐々に「はい」の答えが増えている。項目1、2に関しては「はい」が80%を超えた。ステージ別でみると、現S2が昨年度S1に対して、「はい」の回答が全体的に減っている。	・生徒自身が考え、表現する機会をさらに増やすなど生徒の自発性、積極性を引き出す授業を行い、生徒のアウトプットの機会を増やす。 ・授業に主体的に参加するために、実のある主体的な家庭学習を行う時間が確保できている。 ・客観的な思考及び判断ができる。 ★生徒授業アンケート：1～5の各項目について、前年比10%アップまたは80%以上。 1 思考・判断・表現を求める授業過程 2 アクティブラーニングの視点 3 発問の工夫 4 自然・社会等身の回りの事象とのつながり 5 関心・意欲の喚起	・校内研究授業を実施し、授業後には教員全員参加の研究協議を行って工夫した点や成果についての情報共有を行い、得たものを授業で活用し、生徒に還元していく。 ・考査の問題も「思考」「判断」「表現(論述)」を意識した出題に努める。 ・授業づくりのヒントとなるように、ICTを使った授業振り返りの方法等のデータを蓄積していく。 ・生活の軌跡を利用して面談を実施する。 ・具体的な生活時間を提示する。	・新型コロナウイルス感染症の影響もあり、授業進度の確保を優先したため、前期は校内研究授業を実施していない。 ・考査問題においては、新学習指導要領を意識し、理数系の科目を中心に思考力を問う問題を意識した作問が見られる。 ・ICT活用については、G Suiteの環境を整え、一部実施を始めた。教職員研修を3回実施し、授業の録画や配信方法のみならず、配信授業における授業手順を学ぶなど、配信授業に対する環境整備を行った。普段の授業については一部の教員が活用している状況だが、臨時休業に向けては対策は進んでいる。 ・ICTを活用しての学習の振り返りについては、一部の教員による実施に留まっている。 ・生活の軌跡の活用、面談を随時行い、学習状況、生活状況の改善がなされている。 ・学校評価アンケートにおいては、生徒から「授業の充実」については88.9%、「授業の工夫」については84.8%の肯定的な回答を得ている。授業アンケート(前期)は9月25日に実施する予定。	C	・校内研究授業は後期に実施し、協議内容を今後の授業改善につなげていく。 ・思考力・表現力を問う出題について、今後も学習企画委員会で検討していく。 ・G Suiteの活用例のデータ収集を続け、共有できるよう使用方法や実践方法の研修の機会を設けるとともに、配信できる教員を増やし、今後の臨時休業等に備える。 ・ICTによる学習の振り返りを展開し、自分の学力等を客観的に把握させながら、学力の向上を目指す。 ・生活の軌跡を活用した面談を続け、学習状況、生活状況の改善に向けた、タイムラグのない指導を継続する。 ・授業アンケートの結果を分析し、後期の授業改善に生かす。
		【学習企画】 ・年度初めに導入し、使用についてはこれからの状態である。 ・家庭学習時間の目標値に関して、学習習慣の定着は生徒による個人差が大きい。 S1: 家庭学習時間2時間以上は8、9、11月を除いて未達成(通年平均55%) S2: 同上2時間半以上達成は6、8、9、11月のみ(通年平均48%) S3: 同上5時間以上32%(ただし、6月以降) いずれも目標は達成していない。	・長期休業中の課題の提示、進捗状況のチェックなどに活用できている。 ・急な連絡などに活用できている。 ・臨時休業などに対応するための動画配信などの研修を行い、教員が手法についての基礎知識を有している。 ・学習アプリの使用方法を全職員が会得しており、有効に活用できている。 ・生徒、教員の情報モラルが形成されている。 ・家庭学習時間の目標値 S1: 2時間以上の生徒が継続して70%以上。 S2: 2時間半以上の生徒が継続して70%以上。 S3: 6月以降5時間以上の生徒が50%以上。 ★生活の軌跡の記録で評価する。	・必要に応じて、研修会を実施する。 ・生徒個々のネットワーク環境を把握し、必要に応じて、フォローできる体制をつくる。 ・学習アプリの使用例や、各教員の工夫について、情報が共有できるように研修などを随時行う。 ・S1・2については、ステージと協力し、家庭学習時間目標値の達成者を6割から始めるとともに、1時間未満の生徒をなくすよう面談等の充実を図る。	・8月からS1・S2もスタディアプリ高校講座(5教科型)が利用できるようになり、全ステージで登録が完了した。 ・S2では、英語学習アプリを定期的に利用できている。 ・S1・S2については、5教科型のスタディアプリの導入時期の影響もあり、夏季休業中以降での十分な活用までには至っていない。教科間の調整も含め、ステージ内で協議が必要な状況にある。 ・学習時間について、S1は目標を達成し続けている。S2はテスト前のみ達成している(前年同様)。S3は8月に目標を大きく超えたところである。 ・家庭学習時間1時間未満の生徒数は4月19名から8月1名と大幅に減少している。	C	・スタディアプリについては、S1・2で夏休み明けには登録が完了したところであり、後期は活用について、各教科、ステージで調整して、全体の計画・運用の方針を示す。教科によって扱われている内容が異なることから、生徒の実情に合わせた利用しやすい方法を提示する。 ・各ステージとも学習時間は増加傾向にある。今後は、学習時間のみならず、学習の質を確認しながら、学力向上を図る。 ・学習時間調査をもとに、学習時間の少ないものに対する指導を今後も継続する。
		【S1】 ・スマホ等による動画閲覧には精通しているものの、学力向上のために学習アプリを積極的に利用している生徒は少ない。	・授業の予習や復習、課題への取り組みが日常化されており、さらに自らの弱点科目を克服したり、興味関心のある分野を探究したりするために、意欲的に学習アプリを活用し、適切な家庭学習時間を維持している。 ★生活の軌跡の記録、考査や模試の成績で評価する。	・生活の軌跡や面談等により、学習時間・学習方法、学習内容を確認し、必要であれば改善を促す。 ・ステージ会等で生徒情報を共有し、適切な指導を加える。	・「スタディアプリ」を活用する生徒は少しずつ増えているが、全体的に意識が高いとは言えない。その一方で、アプリ「クラスルーム」を利用した教科からの配信については、多くの生徒が活用しており、学力向上に貢献していると思われる。 ・生活の軌跡を分析し、学習時間の少ない生徒の把握に努めている。	C	・「スタディアプリ」の活用が少ない生徒に対しては、面談等を通じて従来の予習・復習とのバランスを考えながら個に応じた適切なアドバイスを与え、徐々に学習ツールを利用した家庭学習をルーティン化させていく。 ・生活の軌跡の内容を分析し、面談を通して学習の質の向上を図る。
		【S2】 ・多くの生徒の学習習慣は定着しつつあり、与えられた課題に対しては取り組むことができているが、学習アプリの利用頻度が低い生徒がいる。自ら計画を立て、工夫して学習に取り組む生徒は少ない。	・進路目標を明確に持ち、家庭学習で計画的に学習アプリを活用していることが習慣化されている。 ★生活の軌跡、学習アプリ活用状況により評価する。	・定期的に活用時間を確認する。 ・面談、保護者懇談等の機会をとらえ、現状分析と目標設定を行い、自らの課題に対して前向きに取り組めるように個別指導を行う。	・スタディアプリ英語4技能講座は課題として毎週計画的に行っている。また、高校講座については夏休み前に登録を終えることができた。 ・家庭で学習する教科の偏りが見られる。目標を明確にして、バランスを取りながら学習できる生徒が少ない傾向にある。 ・考査前はしっかり学習するが、日々の学習時間が不十分な生徒が見受けられる。	C	・各教科で生徒のスタディアプリの利用が高まるように課題配信等を利用するなど指導していく。また、授業中、家庭学習の時だけでなく自習時間の課題としての活用も検討する。 ・「生活の軌跡」だけでなく、考査、模試結果も利用して適宜面談を行い、自分の進路を意識させながら、学習時間の増加と質の向上を図る。
		【S3】 ・進路に対する意識は高まりつつあり、年度末には家庭学習時間増加の傾向が見られたが、1時間/1日平均に満たない生徒も数人見られる。 ・学習アプリを3月末に導入し、積極的に利用している生徒も見られるが、継続した取り組みになっていない生徒が多い。	・進路目標に向けて、各自がスケジュール管理を行い、隙間時間の学習や家庭学習を充実させている。 ・自分の考えた道筋を確に表現できる記述力が身についている。 ・英語のスピーキングに対応した授業がなされている。 ・新学習指導要領実施に向けて、新たな教育課程の編成ができている。 ★S1: 1月進研模試3教科の平均点全国偏差値48以上。 ★S2: 1月進研模試3教科の平均点全国偏差値48以上。 ★S3: 11月進研模試5教科全国偏差値48以上20名以上。 ★大学入学共通テストを利用した国公立大現役合格者25名以上。	・定期考査や模試の結果をもとに、各自が自分の状況や分析し、学習に繋がるように面談指導を行う。 ・学習アプリの活用状況を把握し、適切な利用方法について面談指導により助言していく。	・家庭学習時間も増加しており、登校後や放課後、隙間時間を活用し、学習に取り組む生徒の姿も増えてきた。 ・考査や模試の振り返りを大切にし、復習ノートをつくるなど、工夫して取り組む生徒の姿も見られる。 ・スタディアプリの活用も増えてきており(一人当たり時間/週4月: 40分、8月79分)、有効に活用している生徒が増えてきた。	C	・学習時間の増加とともに、学習の質を意識できるようステージ集会やホームルーム、教科面談などを有効に活用し、声掛けを行っている。 ・考査や模試の結果を活用し、自らの課題を明確にし、不得意教科にも前向きに取り組めるよう面談や声掛けを行い、大学入学共通テストや大学入試等に対等できる学力の習得を意識させる。
		【学習企画】 ・学習企画委員会で、不定期にシラバスの進捗状況を確認しており、おおむね達成されている。(臨時休業による遅れは除外する) ・授業や定期考査の問題など、新入試を意識した工夫がなされ始めている。	・シラバスに準じた進捗状況が定期的に確認されている。 ・自分の考えた道筋を確に表現できる記述力が身についている。 ・英語のスピーキングに対応した授業がなされている。 ・新学習指導要領実施に向けて、新たな教育課程の編成ができている。 ★S1: 1月進研模試3教科の平均点全国偏差値48以上。 ★S2: 1月進研模試3教科の平均点全国偏差値48以上。 ★S3: 11月進研模試5教科全国偏差値48以上20名以上。 ★大学入学共通テストを利用した国公立大現役合格者25名以上。	・必要に応じて、研修会を実施する。 ・シラバス進捗状況を定期的に確認する。 ・新入試対応の模試分析を行い、情報を共有する機会を設ける。 ・新しい教育課程の編成について、情報を収集し原案を年度内に完成させる。 ・校外模試の結果を定期的に確認・分析し、学力の定着状況を把握し、改善を図る。	・シラバス進捗状況については、学習企画委員会で定期的に確認を行っている。コロナ休業による遅れのあった教科もあったが、9月現在で遅れはない。 ・新入試対応の情報提供を随時行っているが、研修会を開くには至っていない。 ・新教育課程に関する議論はやや遅れ気味であるが、県教育委員会からの留意事項や外部機関からの情報を参考にしながら、原案を作成している。 ・新型コロナウイルスの影響により、外部模試の結果返却が遅れたため、模試分析は9月25日に実施する予定。	C	・シラバス進捗状況については継続して行い、進捗を確認し学力の保障に努める。英語スピーキングの対応については、学習企画委員会で随時確認する。 ・新教育課程の編成については、大学入試科目の公表に備えながら、原案の完成を急ぐ。 ・受験対策として、新入試施行テストや本年度の模試問題をもとに、入試対応の演習を行う。また、情報収集に努め、必要とされる学力(思考力・表現力などの活用する力)を学ぶ研修会を実施する。 ・模試分析においては、入試制度が変わることを意識しながら、各ステージともに強化すべき分野等の改善を図ることができるよう実施する。
情報収集、情報発信の充実	学校の魅力、生徒の活動状況を計画的に情報発信する	【総務】 ＜ホームページの運用＞ ・更新件数は大幅に増加している。 (更新件数: 平成29年度194件→平成30年度675件→令和元年度956件) ・アクセス数は大幅に増加している。 (平成29年度約297,400件→平成30年度約233,213件→令和元年度427,136件) ＜季刊倉西・倉吉西高通信の刊行＞ ・時期をずらずらして内容を考慮し、年4回ずつ刊行している。	＜ホームページの運用＞ ・生徒の活動や必要な情報が適宜、掲載されている。 ・担当した行事、部活動の様子を教職員が速やかに掲載している。 ・学校の情報がわかりやすく伝わるようにする。 ★ホームページ更新: 平日毎日更新する。 ＜季刊倉西・倉吉西高通信の刊行＞ ・保護者に学校並びにPTAの活動や方針等を適宜、伝える。 ・発刊時期を考慮し、保護者が学校の様子を理解している。 ★季刊倉西4回、倉吉西高通信4回刊行。	＜ホームページの運用＞ ・内容を考慮し、保護者等が求める情報を載せるようにする。 ・緊急の連絡など、速やかに情報発信する。 ・各分掌、ステージ、部活動など、担当した学校行事、部活動の様子を速やかに掲載できるように、適宜、担当教職員への提示の呼びかけを行う。 ＜季刊倉西・倉吉西高通信の刊行＞ ・保護者に学校から保護者宛のメッセージを、倉吉西高通信ではPTA活動を中心とした内容とし、年間計画を立て保護者にわかりやすい紙面とする。 ・季刊倉西を見やすい印刷にし、確実に保護者に届くようにする。	＜ホームページの運用＞ ・更新件数 170件 (9/9現在) ・アクセス数 191,326件 (9/9現在) ・保護者アンケートでは「よく見ている」が50%を超え年々増加している。 ＜季刊倉西・倉吉西高通信の刊行＞ ・季刊倉西: 春号(4月)・夏号(7月)発行、初秋号(9月)・晩秋号(10月)・冬号(2月)発行予定 ・西高通信: 182号(7月)発行、183号(12月)・184号(2月)・185号(3月)発行予定 ・季刊倉西については、内容の変更等に伴い、発行が遅れ気味となった。 ・西高通信と季刊倉西の内容について、時期に応じたものとなるよう工夫が必要である。	C	＜ホームページ＞ ・更新件数が減少したことから、教職員への掲載呼びかけを引き続きを行う。 ・更新されていない内容を、新しい情報へ更新していく。 ＜季刊倉西・倉吉西高通信＞ ・季刊倉西: 計画どおりに発行する。内容について事前協議を十分に行い、保護者に対して魅力あるものとする。 ・西高通信: 引き続きPTA広報部会で内容・構成を検討する。
		＜ミッタシステムの運用＞ ・保護者の登録率は96%。 (登録切れの保護者への再登録、未登録の保護者への呼びかけを年3回行った。)	＜ミッタシステムの運用＞ ・全保護者が登録し、漏れなく緊急連絡を行うことができる。 ★保護者の登録: 100%。	＜ミッタシステムの運用＞ ・未登録の保護者への登録呼びかけを行う(4月・7月・12月の3回)。	＜ミッタシステムの運用＞ ・7月に登録呼びかけを実施 ・登録率 99.4% (9/7現在) ・未登録・配信不能家庭(S1:2 S2:0 S3:0) ・年度当初から登録確認をし、未登録家庭に連絡し一時は100%登録だった。	A	＜ミッタシステム＞ ・12月に再度、登録を呼びかける。 ・連絡など情報をこまめに配信する。 ・未登録者、配信不能家庭に個別に確認する。
		＜中学生体験入学・中学校での高校説明会＞ ・体験入学では、2日間で348名(平成30年度284名)が参加し、99%が「参考になった」と回答。 ・各中学校で3年生への説明会を実施した。(6月)	＜中学生体験入学・中学校での説明会＞ ・中学生や保護者が倉吉西高の情報を持っている。 ★中学生体験入学の参加者アンケートの満足度: 90%以上。	＜中学生体験入学・中学校での説明会＞ ・チャレンジグループ活動の発表や案内など、生徒の活動によって倉吉西高の魅力が伝わるようにする。 ・施設、部活動見学の方法を考慮し、学校の様子がよくわかるようにする。 ・体験入学は保護者にも参加を呼びかける。	＜中学生体験入学・中学校での説明会＞ ・体験入学: 参加予定生徒303名(保護者41名) ・多くの中学生が参加予定だったが中止となった。体験入学前日及び当日を実施予定であった学校紹介、チャレンジグループ活動の発表などを収録する機会とした。 ・説明会: 説明会を予定していた中学校に学校紹介DVDを配布した。	B	＜体験入学・説明会＞ ・体験入学: 収録した学校紹介、チャレンジグループの発表などを編集したDVDを作成し、参加予定であった生徒のいる中学校へ送付する。